第 35 期第 3 回研究会「『当事者問題としての男性学』とジャーナリズムの今後をつなぐ」（放送研究部会企画）終わる

日時：2016 年 3 月 24 日(木)　午後 6 時～8 時
場所：新聞協会中会議室
　　〒100-8543 東京都千代田区内幸町 2-2-1 日本プレスセンタービル 7 階 ）
報告者：田中俊之（武蔵大学）
討論者：中村秀明（毎日新聞論説委員）
司会　：谷岡理香（東海大学）
参加者：16 名
記録執筆者：谷岡理香（東海大学）

今回の研究会は、2015 年「報道の自由度ランキング」が過去最低の 61 位となった日本の報道機関のあり方を、男性学の視座から問い直すことがテーマであった。目的は多様な人材活用と多様な視点を目指すことにある。

報告者の田中俊之氏は、社会とは「職業領域」「地域領域」家庭領域」「個人領域」で成り立っているにも関わらず、日本では「職業領域」だけにスポットライトが当たっている。日本社会における「男性問題」として、働きすぎ、自殺、過労死などをあげ、それが社会問題として取り上げられていない（つまり報道機関が重要であると認識していない）ことを指摘した。特に中高年男性の自殺率の高さは、ジェンダーに着目しなければ説明できない問題であり、「悩みを人に語らない」日本の中高年男性のプライドに言及した。プライドの下には、働きすぎの現状を変える事への抵抗感、自分の内面を掘り下げたくないという思いがあり、それが問題状況を認識できないことにつながっているのではないかと分析した。同時に田中氏は男性だけで解決できる問題ではないことに言及。一例として、日中働いていない（中高年）男性に対する世間の眼差しを「平日昼間問題」と位置づけ、こうした「男性問題」を男性の意識改革にだけ求めることは酷でもあり、社会全体で解決する課題であるとして参加者に理解を求めた。

これに対して、毎日新聞論説委員の中村秀明氏からは、（毎日）新聞における典型的な実像としての「できる記者」の一例をあげ、それが仕事のみで評価されていること、さらに、そうした組織風土に「順応」してしまう（「順応」しなければ生き残れなかった）女性（管理職）の存在についても触れた。こうした点を踏まえた上で、中村氏は社会に一定の価値観を提示する役割を持つ報道組織として、旧来の（男性主流）価値観では社会の大きな変化についていけない可能性を示唆し、少数の女性論説委員の存在が「限定的」ながら多様な価値観や視点の共有につながっているとし、画一的な価値観からの脱却の必要性を説いた。

研究会には、会員以外に、朝日新聞、NHK、民放の現場や人事担当者なども参加した。

それぞれの組織の働き方や課題について発言し、男性の長時間労働を前提とする現状と課題を共有した。その上で従来の働き方を見直さなければ新しい人材を含め多様な人材を得られないことを確認した。社会を見つめる眼差しには、１人の人間としての生き方が問われていることを男性学の視座から提起した意義のある会となった。

最後に職場の「空気」について触れておく。日本の報道組織も一般企業同様に様々な制度は充実しているものの、それを活用できない職場の「空気」がある。今回、田中氏が「２ヶ月の子どもがいるのでお先に」、中村氏は「妻と夕食の約束があるので」とすぐに会場を離れた。中心人物のこうした発言が、男性を社会の一領域である家庭に向かわせる「空気」を醸成していくことを２氏の発言から学んだ次第である。